

レヴィアタンは伊吹の部屋にあるベッドの前に立つとごくりとつばを飲み込んだ。

「レヴィ、みんなにばれないように来たよ？」

「うん。途中で誰にも会わないでこれたよ」

ルシファーは一步引いたところから見ていたが、伊吹は兄弟の人気者だったから部屋に行くのがばれると大体妨害されてしまうのでレヴィアタンは慎重に慎重を期して伊吹の部屋に来ていた。

「本当は私がレヴィの部屋に行ければいいんだけど・・・」

「しょうがないよ。僕のベッドは狭いからここに来るしかない」

「私はレヴィのベッドも好きなんだよ？」

二人はベッドに座って横に並ぶとどちらということもなくもたれかかった。

「僕は伊吹のベッドの方が好きだ。僕のベッド・・・結構ぶつかるでしょ？」

レヴィアタンがそう言うのと伊吹は小さく微笑んだ。

「まあ、レヴィのベッドは元々バスタブだからセックスをするには工夫が必要になっちゃうよね・・・」

「ごめんね。こんな不便なことになっちゃって」

「良いんだよ伊吹！」

伊吹の申し訳なさそうな言葉にレヴィアタンは慌てて言葉を返した。

「僕の方こそあんなベッドを選んじやって本当にごめん。今まで恋人なんてできなかったことがなかったから・・・ああ・・・」

落胆の言葉の後、レヴィアタンの頭の中は自分がいかに恋人など考えていなかったか、そして恋人の存在などありえないかという反省の言葉でいっぱいになった。

「良いんだよレヴィ、レヴィも私も悪くない」

伊吹が体を起こしレヴィアタンの顔に触れるとレヴィアタンは少し涙目になったまま顔を上げた。

「伊吹ありがとう。慰めてくれてすごく嬉しいよ」

レヴィアタンが自分の顔に添えられた伊吹の手に自身の手を重ねると唇が重なってきた。

唇は控えめに小さく何度か触れると改めてぴったりとくっつき伊吹の舌先がレヴィアタンの口の中に入ってくる。

レヴィアタンは自身の舌先を持ち上げ二人の唇が重なり合う部分で戯れるように舐めあう。

その動きはお互いの存在を確かめ合うようにも見えたが、絡めば絡み合うほど高まりあう体温と心臓の音。

「はあ・・・」

唇が離れた時どちらかともなくうっとりとした感情を含むため息が漏れほとんど同時に抱きしめあった。